研究論文

変化する社会への適応方法としての「危機」言語

フィリピンのアルタ語の活性度と消滅プロセスから

木本幸憲（兵庫県立大学）

言語学では1990年代から消滅の危機に瀕する言語についての研究が精力的に行われ，言語ドキュメンテーションや言語復興運動など関連する研究を推進させてきた．本論文ではこれに対し，本来多面的で複雑な事象であるはずの危機言語の問題が過度な単純化を持って取り扱われてきたことの問題点について論じる．本論文ではそれを明らかにするために，183もの言語を抱える多言語国家フィリピンにおいて，10人の母語話者によってしか話されていない危機言語であるアルタ語を取り上げ，その社会言語学的活性度とアルタ語がどのように消滅のプロセスを辿っているかを詳述する．具体的には，アルタを取り巻く多言語社会では，国語，公用語ではなく，相対的に大きな言語コミュニティの言語へのシフトが起こっていること，その言語シフトには，同じ狩猟採集民であるという文化的アイデンティティが関与していることを明らかにする．さらにアルタにとっての言語シフトは，周辺のマジョリティに柔軟に対処するために戦略的に選択されていることを論じ，危機言語を悲観的に評価する従来の態度は相対化されるべきであることを指摘する．

キーワード：危機言語，アルタ，活性度査定，フィリピンネグリート，狩猟採集民

“Endangered” languages as an adaptation to changing societies
Vitality and extinction process of the Arta language

Yukinori Kimoto
(University of Hyogo)

Language endangerment has vigorously been studied in linguistics since the 1990s, and related studies such as language documentation and revitalization have also flourished. This paper argues that the typical academic discourse on endangered languages has oversimplified the issue that should be understood as multi-faceted and complex social phenomena. To illustrate the point, this study describes the vitality and the extinction process of Arta, a severely endangered language spoken in the Philippines. It is found that the Arta community is incorporated into a larger group speaking another tribal language, due to the shared cultural identities as hunter-gatherers. It is also shown that the communities strategically choose their language shift to flexibly cope with surrounding majorities, implying that lamenting attitudes towards endangered languages by researchers should be relativized.

Key words: Endangered languages, Arta, vitality assessment, Philippine Negrito, hunter-gatherers

1. はじめに

この論文の目的は，フィリピンの少数言語，アルタ語の活性度／危機度を記述し，なぜ現在の状況に至ったのかを明らかにすることである．そしてその記述を通じて，90 年代に本格化した危機言語の議論をやや批判的に検討することを目的としたい．従来の危機言語の議論が幾分イデオロギー的であり，消

滅の危機に瀕する言語が，変化する社会に対する当事者なりの適応方法である点をおろそかにしてはならないことを主張する．

本稿の構成は以下の通りである．まず 2 節で危機言語の先行研究を概観し，3 節で，アルタ語とその話者についての言語的・民族的特徴を示す．4 節〜6 節が議論の中心である．4 節では，アルタ語の活性度／危機度を，UNESCO Ad Hoc Expert Group (2003) (以下 UNESCO 2003 と略記)により査定，記述する．それを受けて 5 節では，なぜそのような深刻な状況に陥ったのかという点を，時間的，因果的軸から説明する．6 節は，アルタの状況を踏まえた上で，アルタ語の消滅を，彼らにとっての能動的な新たな環境への適応として見る見方を提示し，従来の危機言語の観点では捉えきれないことを論じる．7 節は結語とする．

2. 危機言語をめぐる議論

Krauss (1992) の論文で，世界の 90%の言語は，今世紀中に失われるか，消滅が危惧される言語である，という予測がされた (Krauss 1992)．そのセンセーショナルな数字は，多くの影響を言語学内外に及ぼし，危機言語を憂慮する論調とそれに対しての学術的取り組みが加速した．表 1 を参照しながら，この流れにある研究を見ていこう．

まず，消滅またはその危機に瀕する言語数の予測

表1 危機言語をめぐる研究の枠組み

①	世界の言語の消滅に関する予測 (Krauss 1992)
②	言語が消滅することのリスク，問題点 (Crystal 2000, Miyaoka 2001)
③	活性度・危機度の測定法（Fishman 1991, UNESCO 2003, Gordon 2005）
④	各言語，諸地域の事例研究（Florey 2010, 田窪 2013）
⑤	言語消滅の要因の考察（Tsunoda 2006, Wendel et al. 2012）
⑥	記録方法確立と危機言語の映像・音声のアーカイブ化事業 (Himmelmann 1998, Austin 2010, Thieberger 2016)
⑦	グラント，専攻・コースの確立 (Dobrin et al. 2007)
⑧	言語復興の取り組み (Grenoble et al. 2005, Hinton et al. 2018)

(Krauss 1992, 表 1-①) は，言語が消滅することに対してどのようなリスク，問題点があるかの議論を加速させることとなった(表 1-②)．また，世界の言語の危機度を測定する手法もいくつか提案され（表 1-③），世界の言語の状況を詳細に報告する『エスノローグ』(Eberhard et al. 2019)には各言語の活性度が記載されているようになった．言語学者による各言語や地域ごとの実情も数多く報告されるようになってきた（表 1-④，オーストロネシアについては Florey 2010，琉球諸語については田窪 2013 など)．また，言語消滅がそもそもどのようなプロセスで発生するのかは各地域固有の歴史的，地理社会的，政治経済的要因が複数関与しており，その理論化や類型化も試みられている（表 1-⑤）．

危機言語研究の興隆は，どのように一次資料を記録し，保存するかという理論，手法を扱う言語ドキュメンテーションの発達も促し（表 1-⑥），それを専門に学べる専攻，コースや，言語ドキュメンテーション専門のグラントも整備されてきている（表 1-⑦）．最後に，消滅の危機に瀕した言語をどのように復興させるかについても，ヨーロッパの少数言語の先行事例を参照しつつ議論されている（表 1-⑧）．

このような輝かしい 30 年間の成果にも関わらず，この種の取り組みはいくつかの問題を孕んでいることが少数ながら指摘されている．まず Krauss (1992) の衝撃的でセンセーショナルな予測には，主にアフリカ研究者から疑義が呈され，「クラウス氏の言っていることは学問的根拠が乏しい」（梶 2002: 111，他に Brenzinger 2001）と批判されている．

二つ目の問題は，危機言語の論調に伴う言語シフトへの否定的な価値付けについてである．(Mufwene 2002, 2017, Costa 2013, Kulick 2019)．言語学者は，言語に関心を寄せているため，当然ながら言語そのものの喪失を嘆く傾向にある．しかし言語コミュニティが現代世界でよりよく生きていく手段として言語シフトが存在するのであれば，それを否定的に評価するのは，言語学者から見た一面的な評価でしかない．Salikoko Mufwene は，言語シフトが，生物多様性の喪失と比肩するほど人類の暮らしの調和や社会秩序に有害なのか，話者コミュニティの現代社会

への適応を阻害していないかを今一度冷静に議論すべきだと指摘している（Mufwene 2017: 203, 208, 209）.

本論文でも同様の観点から，言語だけ取り出してその喪失を問題視することの危うさを取り上げる．以下に本論文の筋道を示す．フィリピンには，文化的, 形質的に他のフィリピン人とは異なる, いわゆるフィリピンネグリートと呼ばれる狩猟採集民が多数の言語民族的グループに分かれて暮らしている（図 1）．彼らは，農耕民とは異なったアイデンティティを有している．ネグリートの一部族で独自の言語アルタ語を話すアルタ人は従来，近隣農耕民族と共生関係を保ちつつも自律性を維持していた（図 1-A）．しかし，彼らの居住地へ農耕民が大量に移住してきた結果（図 1-B), 別言語（アグタ語）のコミュニティに移動し，その結果アルタ人の母語であるアルタ語が使われなくなった(図 1-C).

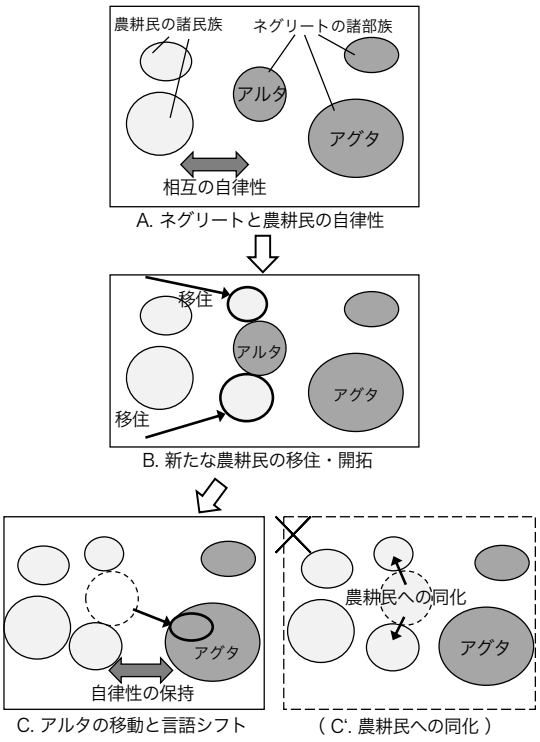

図 1 アルタ人の言語シフトとネグリートの自律性の保持

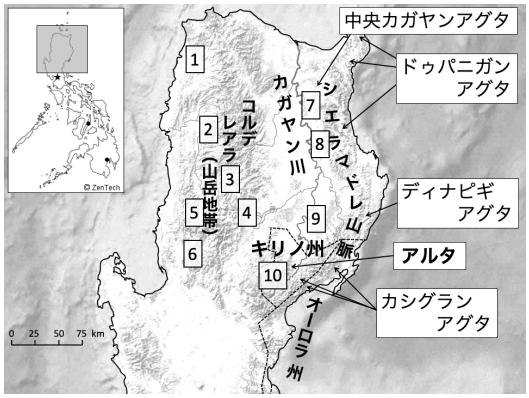

図 2 ルソン島の地理的環境と主なネグリート言語

□内の数字は，本稿で言及の非ネグリート言語

［1］イロカノ語　［6］イバロイ語
［2］イトネグ語　［7］イタウィス語
［3］ボントック語　［8］イバナグ語
［4］イフガオ語　［9］ガッダン語
［5］カンカナウイ語　［10］ブッカロット語

仮に，大挙して押し寄せてきた農耕民に同化する形でアルタ人の言語シフトが起こっていたら（図 1-C'），狩猟採集民としてのネグリートの文化は変容，喪失していただろう．しかし彼らは，似通ったネグリート同士での居住を選択したことで(図 1-C), 狩猟採集民としての生活スタイルを維持したまま現在の暮らしを営んでいる. つまりアルタの場合には, 彼らなりに変化する社会へ適応した結果として言語シフトが起きていると考えられるのである.

この事例は, 危機言語の問題において, 言語の喪失だけを前景化させ，それを社会問題として提言することの危うさを示唆する．本論文のタイトルの「危機」という部分を括弧づけしたように，本論文では，従来無批判に継承されてきた危機言語研究の枠組みを相対化し，個々の実情に合わせて価値付けるべきであることを論じたい.

3. アルタ語とその話者

3.1 ルソン島北部の言語景観

アルタ語はフィリピンの北部に位置するルソン島

（Luzon）で話されている．ルソン島には，フィリピンで最大の長さを誇る河川，カガヤン川が，中心から北に向かって流れており，その東西をシエラマドレ山脈と，コルデレアラ（山岳地帯）の山々が取り囲んでいる（図 2）．このルソン島の北中部は多くの農耕民族の言語が話されている．カガヤン川流域は，カガヤン人として総称的に呼ばれているイタウィス人（Itawis 図 2 の［7］），イバナグ人（Ibanag［8］），ガッダン人（Gaddang［9］）等が住んでいる．2000 m 級の山々がそびえ立つコルデレアラは，イトネグ人（Itneg［2］），ボントック人（Bontok［3］），イフガオ人（Ifugao［4］），カンカナウイ人（Kankanaey［5］），イバロイ人（Ibaloi［6］）など，多くの言語集団がひしめき合っている地域である ．イロカノ人はかつてルソン島北東端のイロコス地方［1］にいたが，各地に拡散したため，イロカノ語（Ilokano）は，現在ではルソン島北部の地域共通語としての役割を果たしている．

一方で，ルソン島は，アルタを始め，多くのネグリート民の住む場所でもある．ネグリートは，言語系統としては他のフィリピンの言語と同じオーストロネシア系の言語を話すが，低身長で，暗い色の肌，細かく縮れた毛髪を持つ点で，他のフィリピンの集団とは形質的には異なる特徴を持つ．例えば，太平洋に面する東海岸には，カシグラン・アグタ，ディナピギ・アグタ，ドゥパニガン・アグタなどが，カガヤン川流域にも中央カガヤンアグタの人々が暮らしている（図 2 参照．Reid 2013, Robinson & Lobel 2013）．ルソン島東海岸の中でも特にオーロラ州は多くのカシグラン・アグタが暮らしている．「アグタ」と名のつくネグリートは多いが，それぞれの言語は相互意思疎通が難しく，別言語を話す諸集団とも呼ぶべき存在である（ただしネグリートとしての同族意識があることは 5.2.2.で述べる）．しかし以下では，単に「アグタ（語）」と言う場合には，アルタの近隣に分布するカシグラン・アグタの人々ないし彼らの言語を指すこととする．

3.2. アルタ語とその話者

3.2.1 アルタ人の地理的分布

アルタ人（アルタ語母語話者，以降特に民族的特徴について言及する際にはアルタ人と呼ぶ）は，少なくとも 3〜4 世代にわたってキリノ州（Quirino）に住んできた（p.x の図 4 も参照）．キリノ州はカガヤン川の上流部に位置しており，アルタ人の他にアグタ人（ネグリートに属する），イロゴット人（別名ブッカロット）の居住地域であったが，20 世紀に入ってから，農耕民が移住し，急激な人口増加を見ている（5.2.1 節参照）．約 20 年前までアルタ人はキリノ州のアグリパイ市（Aglipay）のディスブ（Disubu）という地域に住んでいたが，現在は，ナグティプナン市のディシムガル地区などに移住している．代表的な集落はカルボ（Kalbo）とプランルーパ（Pulang Lupa）である．そこに 8 人のアルタ語母語話者が住んでいるが，コミュニティの大部分はナグティプナン・アグタ語母語話者から構成されている．

キリノ州以外にも，東海岸のオーロラ州にも 2 人の話者が移住して暮らしている．1 人はディナルガン市（Dinalungan）のアグタ語コミュニティに，もう 1 人はオーロラ州カシグラン市のアグタ語コミュニティに暮らしている．

以下では，アルタ人がネグリートとしての形質的特徴を持ちながらも，言語としては他のフィリピンの言語と同じオーストロネシア語族に属するという二重性について述べる．

3.2.2. オーストロネシアとしてのアルタ語

アルタ語は，台湾，東南アジア島嶼部，オセアニアなどに広がるオーストロネシア語族に位置づけられ，特にマレー・ポリネシア語派，北部ルソン語群に位置づけられる（Reid 1989，著者 2017a,b(査読時に省略)）．上述の民族集団の各々の言語はすべて北部ルソン語群に属しているが，相互意思疎通の観点からは，言語同士の近さ（i.e. 言語か方言か）は異なる．例えば，北部ルソン諸語内のボントック語［3］とカンカナウイ語［5］は，相互意思疎通が可能であるが，アルタ語は，近隣諸語との相互意思疎通が不可能である．これは特に語彙的な違いにおいて顕著である

ほか，文法的にも格標識（決定詞），動詞形態接辞，接続詞，人称代名詞などの実現形が異なることに起因している．例えば地域の共通語であるイロカノ語と比較してみる．

(1) アルタ語，イロカノ語の違い

Art. *Awaŋu tataw tidi tit-taddjor.*

Ilk. *Haanku ammo dagiti ag-tak-takder.*

否定.1単 know 複数.定 自動詞(-進行)-stand

「私はその立っている者達を知らない」

上の例では，「知っている」や「立つ」の語彙もそれぞれ異なるほか，機能語である決定詞の形や否定辞の形も微妙に異なっている．また，イロカノ語では「立っている」という自動詞は進行相を取って ***tak-takder***と語幹を重複させるが，アルタ語では，*tit-*という静止状態を表す自動詞接辞を用いる．さまざまな形式的違いから，アルタ語と近隣言語との間に相互意思疎通は不可能となっている．

3.2.3. 狩猟採集民ネグリートとしてのアルタ人

アルタ人は，カシグラン・アグタ人，中央カガヤンアグタ人，ルソン島中西部のアイタ人（Ayta），フィリピン南部，ミンダナオ島のママヌワ人（Mamanwa）などと同じく，他のフィリピン人とは異なった形質的特徴―低身長，黒い肌，強く縮れた毛髪―を持つ点で，フィリピンネグリートと呼ばれてきた（図 3）．ネグリート民は，およそ 3 万年～5 万年前に，当時は陸続きであった東南アジアの島嶼部（スンダランド）を渡って来た人たちの子孫と考えられている．ただし，3.2.2.で述べたように言語的にはオーストロネシアの言語を用い，Reid (1994)が述べるように一部の語彙を除いてネグリートの基層はほぼ観察されないことから，オーストロネシア系集団が 4,000～5,000 年前にフィリピンに到達して接触を続ける中で，彼らの元々の言語は，オーストロネシアの言語に完全にシフトしたと考えられる．

図 3 ネグリートの人々（アルタ人（中央）とその家族）

言語のシフトが発生したこととは対照的に，文化的には，彼らは長い間狩猟採集の生活様式を保ってきた．アルタは，本来土地所有の概念がなく，数日～1 年程度住まう簡易な家屋を組み立てて，頻繁に居住地を移動するノマド的生活を送ってきた．男性の仕事は，山に行ってイノシシ・鹿・サルを狩猟し，川でウナギなどの淡水魚を捕ること，そして山に入って蜂蜜を採集することである．女性の主な仕事は，家事の他に畑でのタロイモの栽培や，山でのヤムイモの収穫，またパンノキの葉を用いたゴザや入れ物を作製することである．アルタを初めとしたネグリート民は，他のフィリピン人に対して独自性を保ちつつも，米や西洋薬等を受け取る代わりにタンパク源としてイノシシなどを与えるなど相互依存的関係を保って生活してきた（Vanoverbergh 1937-1938, Headland & Reid 1989）．アルタ人はネグリートとして他のフィリピンの民族集団とは異なった形質的特徴，文化的特徴を持ちつつも，他のフィリピン人との相互依存的関係を保ちながら生活を営んできたと言える．

3.3. 調査方法の概要

アルタ語は，2012 年に筆者の調査を始める以前は，Reid (1989) のみがその言語を知る唯一の文献であった．従って，以下で述べる調査結果は，基本的に筆者のフィリピンでのフィールドワーク（2012 年～2018 年；通算 25 ヶ月）に基づいている．筆者は 2012 年にアルタ語の話者数調査を行い，それからキリノ州のディシムガル地区，オーロラ州のシンバアン地区で言語調査を行っている．さらに，先行文献として

Reid (1989)，また，筆者より先に調査を行った人類学者 Thomas Headland 氏（SIL International, 1977 年 9 月 20, 21 日調査），言語学者 Lawrence A. Reid 氏（ハワイ大学名誉教授 1987 年夏調査）との私信を通じて，1977 年当時，1987 年当時の状況をデータとして組み込み，アルタ語コミュニティにどのような変化が発生したかを考察した.

4. アルタ語の活性度

2 節で述べたとおり，言語学内外での危機言語問題の高まりとともに，世界の言語がどのような活性度／危機度にあるかを調べる枠組みが幾つか提案されてきた(Fishman 1991, UNESCO 2003, Gordon 2005, Lewis & Simon 2010 他)．本稿では，言語学者を中心とした UNESCO の臨時専門家会議 (UNESCO 2003) で提唱された枠組みをベースに，アルタ語の活性度／危機度を記述していく．UNESCO の論文では，個々の言語の活性度を，数値で測定できるようになっているが，実際にはそれぞれの言語の地理的・社会的実情に即して観察されるべきものとしている (ibid.: 17). 以下では，アルタ語の活性度の数値による測定はあくまで参考程度とし，アルタ語がどのような活性度にあるかを，フィリピンルソン島固有の社会言語学的状況で捉えることを目的とする．UNESCO (2003) で提示された指標 1～9 を記述の糸口とし，アルタ語の活性度を記述していく（表 7 のまとめも参照）.

4.1. 話者数と世代間の言語継承（指標1～3）

表 2 アルタ語の活性度（話者数と世代間の言語継承）

指標	活性度
指標 1　世代間継承	レベル 2
指標 2　話者数	10 人
指標 3　コミュニティでの割合	レベル 1

世代間の言語継承がどの程度の範囲で行われているかは，言語の活性度を測る明確な指標として考えられてきた（Fishman 1991, Lewis et al. 2010）．**指標 1** では，どの世代まで言語継承が行われてきたかを指標化している．どの世代でも言語継承が行われており，他の言語の介入が見られないレベル 5 から，限定的に子どもに言語継承が行われているレベル 4，親世代（レベル 3），祖父母世代（レベル 2），曾祖父世代（レベル 1）で言語継承が止まっているレベル，どの世代の話者もいないレベル 0 まで指標化している.

アルタ語は，**レベル 2** (Severely endangered) に該当する．どのコミュニティにおいても現在言語継承は行われていない. すべてのコミュニティで, 子どもはアグタ語を第一言語として習得する他，オーロラ州ではフィリピンの国語であるタガログ語，キリノ州では地域のリンガフランカであるイロカノ語（3.1.参照）を話す.

指標 2 は，母語話者の絶対数を問題とする．アルタ語の母語話者数は（誰を流暢な話者と捉えるかにもよるが）**第一言語としてアルタ語を習得した世代の人数をカウントすると，現在 10 人である.** 表 3 にまとめた通り，アルタ語のみの単一言語話者はおらず, すべての話者はアルタ語とアグタ語, イロカノ語を使用できる. その中でも, アルタ語のほうが流暢な話者は 10 人, アグタ語とイロカノ語のほうがアルタ語よりも流暢な第二言語話者が 41 人存在する.

10 人という母語話者の人数は，それだけでも随分と少ないが，さらに深刻なことは，アルタ語がもはや，**話せるが話さない**という話者で構成されている点である．母語話者は 1 人を除き 40 代以上であり，普段の会話では，アルタ語が飛び交うことはほとんどない．その結果，20 代までの若い世代はアルタ語に触れ, 習得できる環境にないため, 彼らに言語は継承されていない.

第二言語話者 41 人は, 古くからアルタ人との付き合いがあり，アルタ語を多少なりとも使うことができる．しかし彼らはアグタ人としてのアイデンティティを持っており，周囲も彼ら自身も彼らをアルタ人とは見なしていない. また実際の言語調査でも, ア

表 3 アルタ語の話者数

アルタ語のみを使用できる	0
アルタ語をアグタ語ないしイロカノ語と同等もしくはそれ以上に流暢に使用できる	10
アグタ語ないしイロカノ語をアルタ語より流暢に使用できる	41

ルタ語がそこまで流暢ではないため，一貫してアルタ語の談話を完成させたり，アルタ語の語彙を答えることは得意ではない．例えば *paditəŋ*「病気」，*i:yan*「魚」，*lupuy*「疲れ」（以上アルタ語）などの日常語彙であっても，*ladu, ikan, pagil*（以上アグタ語）で返ってくる例が観察された．このように，アイデンティティ，言語能力の両面でアルタ人とは異なる属性を持つものの，アルタ語を多少なりとも駆使できるアグタ人は存在する（ただし第一言語として習得した母語話者と第二言語として使用する話者との言語能力の差は，今後の調査でより詳しく分析する必要がある）．

指標 3 は，特定のコミュニティにおけるその話者人口の相対的な割合を問題にしている．ここでは，特にアイデンティティを有する民族集団，宗教集団等の特定のコミュニティにおいて，どの程度の割合の話者がその言語を話すことができるかを指標にしている．指標 3 では，アルタ語は，**当該コミュニティのほとんどの者がその言語を話さない（レベル 1）**か，計測不能，となる．まず計測不能となる可能性を述べると，すでにアルタ人だけで構成されるコミュニティは存在しない．従って「アイデンティティを有する民族集団，宗教集団等の特定のコミュニティ」をアルタ人コミュニティに限定すると，そもそもアルタ人がコミュニティをなしていないため，指標 3 は測れない．

しかし，5.2.2 節で述べるように，アルタ人は，アグタとともに「ネグリート」というより大きなアイデンティティを有している．この事実を元にして，現在アルタ人が所属しているネグリートコミュニティと，アルタ語母語話者との割合を算出すると，当該コミュニティのほとんどの者がその言語を話さないレベルとなる．アグタ語コミュニティに住む者は，配偶者がアルタ人であっても，アルタ語を全く知らない場合がある．例えば図 3 の家族は，アルタ人の夫（中央）とアグタ人の妻（左端）の家庭だが，子ども，妻ともに基本的な語彙である「知っている」，「好きだ」という語彙さえ知らなかった．それほどコミュニティ全体への影響力がなく，周囲の人にとっても耳慣れないことばとなっている．ただし別のコミュニティでは，アルタ人と近所付き合いの長いアグタ人一家，またはアルタ人との姻戚関係を持つアグタ人がおり，彼らはアルタ語を多少なりとも話すことができるが，コミュニティ全体からみればごく少数派である．

4.2. 言語使用領域（指標4, 5, 6）

表 4 アルタ語の活性度（言語使用領域）

指標	活性度
指標 4　言語使用領域	レベル 1
指標 5　新たな使用領域への適応	レベル 0
指標 6　教材・正書法	レベル 2

UNESCO (2003)では，指標 4, 5, 6 として言語使用領域(domain)を挙げている．**指標 4** は，どの場面でその言語が用いられるかに関する指標である．活性度の高い言語は，使用される領域は遍在的だが，言語が衰退すれば，その言語の使用場面は減少し，それが果たす機能も減少する．

アルタ語の言語使用領域は極めて限られており，**非常に限定的な使用領域（レベル 1）**と位置づけられる．指標 3 で述べたように，アルタ語の場合，アルタ人のみで構成されるコミュニティが存在しないため，儀式やイベントなどで用いられることもない．言語を使用する機会が生じるのは，同一コミュニティ内の数少ない母語話者同士が対面したときや，別コミュニティの古い友人，親戚が訪ねてきたときなどである．アルタ語母語話者が普段の生活でアルタ語を用いることはまれである．

指標 5 では，テレビ，インターネットなどの新たに出現した言語使用領域の出現にどの程度まで適応しているかを基準としている．アルタ語は，テレビ，ラジオなどで使用されていないほか，流暢な話者はインターネットなどのデバイスを使用する機会はないため，**どの新たな領域にも進出していない状態（レベル 0）**に該当する．アルタ語がインターネットなどで用いられていない背景には，流暢な話者が小学校教育を受けていないため，文字の読み書きができない点や，携帯電話などを持っても携帯通信料が払えない，という事情が関係している．

書き言葉や学校教育などでの言語使用域を拡張させるためには，どの程度正書法や教材などが整備されているかが鍵となる．**指標 6** では，言語教育と識字教育のための教材がどの程度整備されているかを問題としている．レベル 5 は，正書法が整備されており，文法書，辞書，テキスト，文芸，日常メディアでの書記の伝統がある状態であり，レベル 0 は，教材や書物以前に正書法も存在しない状態である．

アルタ語は，**教材は存在するが，一部にしか利便性がなく，学校教育でもアルタ語の識字教育は取り込まれていない状態（レベル 2）**に相当する．著者は，アルタ語文法・語彙に関する博士論文(文献は査読時に省略)以外に，教育用教材（文献は査読時に省略）を執筆した．その教材は，アルタ人がキリスト教徒であることを踏まえ，旧約聖書の「ノアの方舟」を題材にした絵本（イロカノ語，英語対訳付き）を作成し，コミュニティに配布している．しかし以上の貢献は微々たるものといわざるを得ない．複数のコミュニティ全体に教材が行き渡っているわけでもないため一部にしか利便性がなく，学校教育でもアルタ語の識字教育は取り込まれていないからである．

4.3. 言語への姿勢と政策（指標7，8）

表 5 アルタ語の活性度（言語への姿勢と政策）

指標	活性度
指標 7　政府の言語政策	レベル 4
指標 8　話者の態度	レベル 1

指標 7 と指標 8 は，言語へのメタ的認識と政策についての指標を提示している．**指標 7** は，政府機関等がその言語に対してどのような姿勢を持ち，どのような施策を行っているかを問題にしている．レベル 5 (平等な支援) は，すべての言語は法で守られ，政府は明確な政策を実行し言語の持続を図っているレベルであり，レベル 0 (禁止)では，少数言語はどの使用領域においてもその使用が禁止される．アルタ語は，**レベル 4 (差異化された支援) : 非優勢言語が政府によって保護されているが，公的な場での使用までには及ばないレベル**に該当する．

フィリピンでは, 1997 年に先住民権利法(Republic Act No. 8371)が制定され，先住民による土地所有の権利，自決権が認められたほか，教育省は 2009 年と 2012 年に，英語，国語ではなく，母語ベースの多言語教育に関する勅令を出している（Burton 2013）．しかしこのような政策は，アルタ語の現状に対しては全く機能していない. 母語教育は, イロカノ語などの地域共通語がターゲットとなっており, アルタ語, アグタ語などの少数言語での教育は義務化されていない．また実際問題として学校教員が必ずしも当該少数言語の話者であるとは限らないため，母語ベースの多言語教育には限界がある. 以上より, 指標 7 においては, 実質的な支援はなく, 優勢言語へのシフトを放任している状態となっている．

言語の活性度を分析するためには，コミュニティメンバー自身が当該言語にどのような態度を持っているかがキーとなる. **指標 8** では, すべてのメンバーが当該言語の使用を促進したいと考えている水準（レベル 5）から，すべてのメンバーが当該言語の喪失に無関心で優勢言語の使用を好む水準（レベル 0）が挙げられている．アルタ語の場合は，**レベル 1 の，僅かな者しか言語の維持に積極的ではなく，他の者は無関心であるか，言語喪失を加速させている状態**に該当する．

一般的に見てアルタ人は，自言語に対して肯定的な態度を持っている. 彼らは, 外部の人間が彼らの言語を調査されることに対して, 興味を持ち, 退屈な語彙調査などにも積極的に協力してくれる．また自分たちの話している音声，映像が調査者を通して世界に発信され, 後世まで残ることに期待を抱いている．普段はアルタ語で他者に話しかけることはほとんどないが, 調査者がいるときには, アルタ語を話すことのできないアグタの友人に対して，自慢をするかのようにあえてアルタ語で話しかけて，ちょっと困り顔になるのを楽しむ姿も見られる．

ただしそれをもってアルタ人が消滅しつつある自言語に対してメタ的意識を持っているとは言い難い. 彼らは自言語の維持には無関心であり, 言語が失われて悲しいと言う態度を持っていない．そしてアグタ語を話すことにためらいがあったり，心理的抵抗を持ったりしているという心境も見られない．

また, コミュニティの多数派は, 第一言語がアグタ

語であることから，アルタ語に無関心である．コミュニティの大多数は，アルタ語に関して中立で，あまり関心を寄せていないのが現状である（ただしコミュニティ全体としてアルタ語を虐げるような差別的意識は存在しない）．

4.4. ドキュメンテーションの量と質（指標9）

表 6 アルタ語の活性度（ドキュメンテーション）

指標	活性度
指標 9　ドキュメンテーションの質と量	レベル 3～4

指標 9 は，ドキュメンテーションがどの程度の量と質で進められているかを問題とする．ここでのドキュメンテーションとは，いわゆる Himmelmann (1998) の言語記述と言語ドキュメンテーションの両方を指す．言語記述とは，文法，辞書などの言語学的分析が入った状態の記録を指すのに対し，言語ドキュメンテーションとは，録音・録画されたデータとその書き起こしなどのコレクション，またはそれがアーカイブされた状態のことを指す（表 1-⑥）．

指標 9 では，包括的な文法書，辞書，テキストデータが複数あり，書き起こしのなされた高水準の録音・録画データが十分に存在する水準（レベル 5）から，いかなる記録も存在しない水準（レベル 0），までがランク化されている．アルタ語は，**レベル 3～4**，つまり**十分な量の書き起こしされた録音・録画データが十分に存在し，文法書がある状態**である．

文法については，筆者（年号，査読時には省略）で包括的な記述を行った．一方語彙集は同書での付録として記載しているが未だ不十分な量である．テキストデータと録音・録画データについては，バンベルク大学（ドイツ）の筆者（年号，査読時には省略）で公開している．これは，アルタ語書き起こし，形態素境界ごとのグロス，文法役割などの統語情報，英語対訳，発話毎の音声再生機能，アルタ語アノテーションの概要などが付されたアーカイブである．

4.5 アルタ語の活性度（まとめ）

以上，UNESCO (2003) の観点を用いて，アルタ語の活性度を記述した．**表 7** では指標 1～9 がまとめられている．

表 7 アルタ語の活性度（まとめ）

指標	活性度
指標 1　世代間継承	レベル 2
指標 2　話者数	10 人
指標 3　コミュニティでの割合	レベル 1
指標 4　言語使用領域	レベル 1
指標 5　新たな使用領域への適応	レベル 0
指標 6　教材・正書法	レベル 2
指標 7　政府の言語政策	レベル 4
指標 8　話者の態度	レベル 1
指標 9　ドキュメンテーション	レベル 3～4

表 7 で分かる通り，指標 7 と指標 9 を除いて，値は，軒並みレベル 0~2 と低い．特に，話者数と世代間の言語継承（指標 1～3），言語使用域（指標 4～5）に関連する活性度の低さは深刻である．

次節では，時間軸と因果関係の軸を導入し，なぜアルタ語がこのような消滅の危機に瀕する状態となったのかを明らかにしていく．

5. アルタ語消滅のプロセス

この節では，以下のことを述べる．まず，5.1 節では，アルタ人のコミュニティから移動し，キリノ州，オーロラ州に点在するアグタ人コミュニティに移住したことが，直接の消滅の原因であることを述べる．次に，5.2 節では，その移動の原因について 2 つの観点から論じる．

5.1. アルタ人の移動の軌跡

5.1.1. ディスブでの生活以前

ディスブ（3.2.1 参照）にコミュニティが形成される前にアルタ人がどこに居住していたのかは分かっていない．しかしアルタ人 A の証言によると，彼の祖父は，より下流のマガット川付近に住んでいたことを彼に語ったという．そこは現在ダムになっている．この情報は，Edilod「下流の民」というアルタ人の別名とも整合する．

アルタ人 A を除いてほとんどのアルタ人にとって，かつて自分の先祖がどこに住んでいたかについ

ての記憶は継承されていない[1]．ただし，アルタがノマド的生活様式を持っているので，遠くない過去に別の場所に居住していたことは容易に推測できる．

5.1.2. 最後のアルタ語コミュニティ，ディスブ

多くのアルタ人の証言から，かつて彼らはキリノ州アグリパイ市にある集落，ディスブに暮らしていたことが明らかになっている．Thomas Headland が学術界で初めてアルタを記録した際も 1977 年にキリノ州アグリパイ市を訪れた時のことを，以下のように証言している．「私が 1977 年 9 月にキリノ州，アグリパイ市のディスブで彼らのところに訪れた時には，アルタの人々が住んでいた．覚えている限りでは，30 から 40 人の成人ネグリートがおり，そのうち 22 人がアルタ語母語話者であると述べていた．他はアグタ語カシグラン方言かマデラ方言の話者であった．」（T. Headland, 2015 年 5 月 2 日私信）．Reid も 1987 年，2000 年のフィールド調査で，ディスブにアルタ人がいたことを記している．

自分たちがディスブに住んでいたという記憶は，彼らのアルタとしてのアイデンティティと強く結びついている．ディスブで育ったことは，単なる誕生地としての記憶ではなく，アルタ語を流暢に話す人という属性と結びついている．例えば，彼らは *E:-Disubu, Taga-Disubu*（ディスブ出身者）という表現を，「アルタ人である」「アルタ語母語話者である」という意味で用いる．ア**ル**タ語をよく話すア**グ**タ人について，「あの人はアルタ人か」と聞くと，「違うよ，だって彼女はディスブ出身じゃないもの」と答える．ディスブはアルタ語が活発に用いられていた最後のコミュニティであり，ディスブという地名は彼らの出自と第一言語に関わるアイデンティティとして深く刻み込まれている．

一方，1977 年の時点でこのコミュニティにアルタ人以外のネグリートがいたという T. Headland の記述も重要である．彼らの中には，たまたま立ち寄った者もいれば，居住していた者がいたことも考えられる．すでにこの時，アルタだけでは婚姻関係が維持できないほど人口が減少しており，アグタとの交流が活発だったことを示している．

5.1.3. ディスブコミュニティの消滅とアグタコミュニティへの移住

2000 年代に入り，アルタ人は，アグリパイ市から忽然と姿を消した．ディスブ地域に住んでいた世代（太平洋戦争の前後に生まれた世代）が亡くなり，残りの者は，そのコミュニティを去り，カガヤン川水系を川上に遡ったシエラマドレ山脈の奥地，ないし，山脈の反対側のオーロラ州へ移動したのである（図 4）．

しかしこの地区はすべて，アグタ人がテリトリーとしてきた場所でもある．アルタ人はすでに交流の進んでいたアグタ人との親族関係を利用して（ピヴォットとして）アグタ人コミュニティへ移住した．

例えば，あるアルタ人 C は，アグタ人と結婚し，ナグティプナンに移住したが，その後その配偶者が亡くなった．そのあと別のアグタ人と結婚したが，それが契機で遠くオーロラ州ディナルガンのシンバアン地区に移住した．ディナルガン，カシグランを含むオーロラ州北部は，アグタ人がネグリートの大多数であるため，彼らの家庭は，アグタ語コミュニティの中で生活を営んでいる．別のアルタ人 A も，アグタ人と結婚し，ナグティプナンのディシムガル地区に移住している．そのため，彼らの家庭も，アグタ語コミュニティの中で生活を営んでいる．

その結果として，アルタ語コミュニティが消失し，多数派がアグタ語を使用するコミュニティで生活する中で，アルタ語使用は廃れてしまった．そして，生まれる子どもがアルタ語を習得する機会はなくなり，アルタ語はもはや彼らの母語ではなくなった．このような結果として，4 節で述べたアルタ語の状況

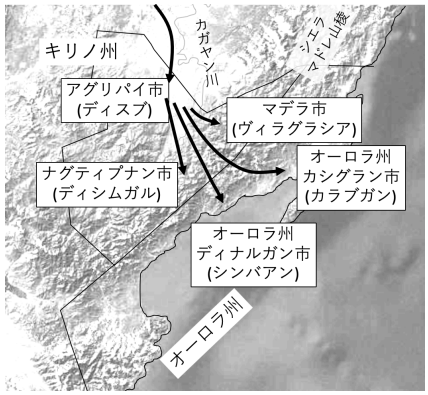

図 4 アルタ人の移動経路

表 8 キリノ州に集住した主な民族と出身地と集住地

集団名	出身地域	市（集住が見られる地区）
イロカノ	イロコス地域他	キリノ州全域
タガログ	特定不可	キリノ州全域
イフガオ	イフガオ州	ナグティプナン市（2 地区）
トゥワリ地域		マデラ市（6 地区）
アヤガン地域		アグリパイ市（5 地区）
		ディフン市（3 地区）
		カバロゲス市（3 地区）
		サグダイ市（4 地区）
カンカナウイ	山岳州	ナグティプナン市（5 地区）
	ベンゲット州	マデラ市（2 地区）
	南イロコス州	アグリパイ市(2 地区)
		ディフン市（3 地区）
		カバロゲス市（1 地区）
ボントック	山岳州	ナグティプナン市（1 地区）
イトネグ	アブラ州	ディフン市（2 地区）
イバロイ・カリングヤ	ボコド州	ディフン市（1 地区）
	アトク州	カバロゲス市（1 地区）
	ベンゲット州	
イタウィス	イサベラ州	ナグティプナン市（4 地区）
ガッダン	イサベラ州,	ナグティプナン市（2 地区）
	ヌエバビスカヤ州	ディフン市（1 地区）
		マデラ市（1 地区）
	カガヤン州	
イバナグ	イサベラ州	ナグティプナン市（2 地区）
	カガヤン州	

Felipek Lumiwues 氏, Elizabeth Saure 氏, Stella Pascual 氏 (NCIP, Maddela Service Center)と共同で作成

が生まれた.

5.2. 移住とコミュニティ消滅の要因

以上のような移動を経て，アルタ人は自身のコミュニティを失い，アグタコミュニティに移動した．ここで疑問が生じる．1 つ目に，なぜディスブ地区から移住することとなったのか．2 つ目に，なぜ独自のコミュニティを築かず，アグタに併合したのかである．以下，その疑問を明らかにしていこう．

5.2.1 なぜディスブ地区から移住することとなったのか

ディスブからの移動には，キリノ州に次々と移住してきた農耕民が関係している．キリノ州は現在は開けた土地であるが，かつては鬱蒼とした熱帯雨林に覆われていた. 伝統的には, アルタ人などのフィリピンネグリートのほか，ブッカロット人（図 2［10］）コミュニティがそれぞれのテリトリーを分けながら暮らしていた．しかし 20 世紀に入って，さまざまな場所から農耕民が移住し，大規模な開拓が進められた.

まず, キリノ州の人口変動を見てみる. 例えばマデラ市では，1939 年には 3923 人であったのが，2015 年には 38499 人と，約 10 倍の人口増加を記録している．またディスブ地区のあったアグリパイ市は，1960 年には 3976 人であったが, 2007 年には, 27787 人と，7 倍近くの伸びとなっている(Philippine Statistics Authority 2017)．このような開拓民の移入が 20 世紀前半から始まったことで，長いスパンで，人口密度の増加が発生したと考えられよう.

具体的にどのような集団が移住してきたのかを示したのが表 8 である．この表で示されている通り，フィリピン人の多数派であるタガログ語話者，イロカノ語話者のほか，多数の民族集団の移住が見られ，彼らはそれぞれ独自のコミュニティを形成してきた．例えば，山岳地帯からは，イフガオ語（図 2 の［4］）のトゥワリ方言話者，アヤガン方言話者が，キリノ州の各市に移住してきたほか，ボントック語話者［3］，カンカナウイ語話者［5］の集住が見られる．カガヤン川の下流地域（北部）からは，イタウィス語［7］，イバナグ語［8］，ガッダン語［9］話者がキリノ州に移住している. アグリパイ市に限ってみても，タガログ，イロカノ，イフガオ，カンカナウイのコミュニティが形成されていることが分かる. 実際, 長い間キリノ州でフィールド調査をしていても，圧倒的大多数が外部から流入してきた住民であるという印象を受ける.

このような開拓民の流入は，狩猟採集社会に大きな変化を及ぼしたと思われる．多くのネグリートコミュニティで観察されているように（Rai 1990），森林伐採, 農地開拓は, その土地の生態系を大きく変化させ, もともとあった動植物の多様性が失われる. また，森林破壊や農地開拓は，水質の変化をもたらし，彼らが採集する河川の周りに生える野草（*paku* と呼ばれるワラビなど）が獲れなくなる（ibid.: 100-105）. また開拓は狩猟のための場所を減少させる．狩猟採集生活を持続させるためには多くの土地を必要とするため, 開拓による狩猟の場の縮小は, 彼らの生活に負の影響を及ぼしたと考えられる（狩猟採集生活が農耕生活に比較して広い土地を必要とする点につい

ては Bellwood 2004 を参照).

農耕民の移住は，狩猟採集生活を持続させるための環境に数々の負の影響を与えたため，ディスブは彼らにとってもはや魅力的ではなくなり，その土地を離れることを選択したと思われる.

5.2.2 なぜ独自のコミュニティを築かず，アグタに併合したか

次に 2 つ目の疑問, なぜアルタ人は, 独自のコミュニティを築かず, アグタに併合したのか, という点を考えていこう．現在，どこのコミュニティに行っても, アルタだけのコミュニティはない. すべてのアルタ人は, アグタ人のコミュニティで暮らしている. 以下では，アルタとアグタは，同じネグリートとして，共通のアイデンティティを共有しているため，このような同化が漸次的に発生したことを論じる．その共通のアイデンティティを構成するのは，ネグリートとしての遺伝的・形質的共通性と, 文化的共通性である.

まず，アルタ人とアグタ人は一般に，前述の通り，他のフィリピン人とは異なった形質的特徴を有する．その大きな特徴は，細かい縮れ毛で，肌は黒く，身長は比較的低く小柄である点が挙げられる(Stock 2013)．次に彼らは，文化的にも数多くの共通性を持ち, むしろ違いを見出すのが難しいほどである. アルタとアグタが共通して持つ際立った特徴は以下の通りである.

1. 狩猟を主な生業としてきたこと
2. 平等主義社会（egalitarianism）であること
3. 遊動民（nomad）であること
4. 類似した親族構造とそれをベースにした居住・移動生活を行うこと
5. 農耕民と対立的な自身のカテゴリー化

かつては，子どもは幼い頃から弓矢の使い方を学び, さまざまなスタイルの狩猟を行ってきた. このことは関連語彙の豊富さにも表れている. 例えば, アルタ語では「狩猟をする」という動詞は名詞派生動詞を含め 10 あり，時間，場所，道具・仕掛け，人数などによってさまざまな「狩猟をする」という行為を表現し分けられるが, それはアグタ語でも変わらない. 驚くべきことに, 狩猟方法の種類は, 矢の種類とその名前に至るまで，アルタ・アグタ間で類似している．これは, 新たな技術・道具等の伝播が頻繁に発生していたこと，それを可能にする広域のネットワークがあったことを示唆している.

またアルタとアグタに共通しているのは，本質的に平等主義社会である点である．これは特に食糧の共有に顕れており，狩猟でとった獲物などをコミュニティで分け合うことが彼らの重要な規範である (Vanoverbergh 1925: 409, Rai 1990: 56-58)．フィールド調査をする中で，アルタ人家庭にどれだけ豊富に食糧をあげても, 驚くべきスピードでなくなる. それは, むしろたくさんあるがために, 親族や近隣に分け与えようとするからである.

彼らはまた遊動民であり, 狩猟の場所, 季節労働の場所に合わせて，掘っ立て小屋を作って家族で移動して暮らしてきた．元来土地所有の概念を持たないため，政府による定住政策が幾度となく施行されても, 遊動生活を完全に捨て去ることはしない（これは政府の強引な定住政策の問題もある．例えば Headland 1986: 229ff を参照)．現在でも，ある日の調査で簡易な家を作って暮らしているネグリートを見かけても，次のフィールド調査では誰もいなかった，ということはよくある.

また, 親族構造と, 親族関係を基盤にした生活のあり方も類似している（アグタについては Headland 1986 参照). アルタとアグタは核家族であり, 親族関係は，祖先からの系譜（氏族概念など）ではなく，個人をベースにした体系をなす. 例えば, 当人が親族名称で呼ぶ相手とは結婚できないという制約はそのような体系を反映している．親族構造は，結婚以外にも，アルタやアグタの社会行動のすみずみまで影響している. 例えば, 彼らが他のコミュニティで寝泊まりする場合は基本的に血縁関係を頼るほか，近親者であればあるほど，食糧をシェアすることが期待される[2]. 親族を基盤にしたこのような社会行動は生活様式が変化しつつある今も変化していない.

最後に，アルタは，農耕民と自分たちは異なった「人種」だが，アグタは同じ「人種」の同胞であると認識している．例えば，アルタ語には「人」を表す一

般名詞がなく，ネグリートであれば *arta,* 農耕民であれば *agani:*と言わなければならない．もちろん，*arta* というのは「人」という意味ではあるが，アグタ人を指して *arta* とは言えても，農耕民を指して *arta* とは言えない[3]．このような 2 項対立は，ネグリートの多くの言語で見られ，カシグラン・アグタ語では *agta* vs. *ugdin* ないし *puti*，ドゥパニガン・アグタ語であれば *agta* vs. *ogden*（Robinson 2008），中央カガヤンアグタ語では *agta* vs. *ugsin*（Reid 2013），南アルタ（Alta）語では，*alta* vs. *uldin*（Abreu 2018）と呼び分ける．そのような言語的カテゴリーと，上で述べたネグリート諸民族に共有されている身体的・文化的特徴は，それぞれのカテゴリー化を相互に補強し合い，アルタ，アグタ間にみられる強固なアイデンティティの同一性を構築している．

ここから，なぜアルタ人は，独自のコミュニティを築かず，アグタに併合したのかという疑問を解く糸口が見つかる．そもそもアルタの文化は，アグタとの文化的違いを見出すのが難しいほど，似通っている．アグタコミュニティに編入される以前から，ネグリートの広域ネットワークが存在し，文化も共進化してきた．また，言語学者が便宜的に用いてきた「アルタ」というラベルも，彼らにとっては確立したカテゴリーではない．「人」を表す音韻的な変種である *arta* ~ *agta* を用いているだけである．このような文化的，遺伝的，概念的共通性ゆえ，アルタ人は，アグタコミュニティに自然に溶け込んでいくことができたのだろうと理解できる[4]．言うならば，彼らにとってのアイデンティティは大きくは変わっていない．農耕民と同化することを選ばずに，ネグリートとしてのアイデンティティを保ち続けていることを選んだにすぎないからである．

6. アルタにとっての言語シフトとは? 能動的な適応方法としての見方

以上，4 節では，アルタ語の活性度を測定し，ほぼすべての指標において深刻な状況にあることを見た．そして 5 節では，どのようなプロセスでアルタ語が現在の状況に至ったかを述べた．特にキリノ州への農耕民・開拓民の流入と，アルタ人とアグタ人が共にネグリート／狩猟採集民という強いアイデンティティを共有していることが，言語消滅を促した要因として考えられる点を述べた．

しかし我々は，従来から存在する危機言語の評価と同様，この状況を否定的，悲観的に捉えるのが妥当なのだろうか? 5 節の最後で論じた点から示唆される通り，言語シフトを一概に否定的に評価することは妥当ではないと思われる．それは特に以下の理由による．

1. アルタ人はアグタとの生活をポジティブに捉えている．
2. 農耕民との混合は進んでおらず，ネグリートとしての自律性が保たれている．
3. 遊動民として生活，親族関係をベースにした社会行動は変わっていない．

第 1 に，彼らは，現在のアルタ人コミュニティの消滅を悲観的に認識していない．他のネグリートの「同士」と共に生活していることを心強く思っており，多くの者が「以前より暮らし向きがよくなった」と話している．聞き取り調査をしていても，アグタのコミュニティに移ったことは，苦渋の決断であると述べる者もいない．また，多数派のアグタに虐げられていると述べた者はおらず，筆者自身そのような場面に遭遇したことがない．

2 点目に，ネグリートは依然として農耕民と混交せず，自律性が保たれている．もちろんネグリートの内部では，アルタがアグタのコミュニティに同化したように，離合集散は観察される．しかし，文化が似通った狩猟採集民同士での同化ではなく，農耕民コミュニティにネグリートが同化する例は非常に稀である．特に，大多数が農耕民で構成されているコミュニティにネグリートの家族が住むことはほとんどない．これは，言語がシフトしても，ネグリートとしてのコミュニティが維持されていることを示している．

3 点目に，言語の消滅にもかかわらず，彼らの生活スタイルはよく保たれている．Minter（2010）は，ネグリートの伝統的な道具や生業などが失われていることに嘆いてきた文化人類学の系譜を批判的に検討

している．彼女は，「適応」と「回復力（レジリエンス）」という生態学の概念（Walker, Holling, Carpenter & Kinzig 2004）を援用し，実際の彼らの文化は根本的には変容していないことを指摘している．弓矢使用の衰退など生活スタイルの表面的変化にもかかわらず，彼らの文化は外圧をうまくかわしたり（＝回復力），日和見主義的に外からの文化を取り込むことで（＝適応），彼らの文化はしなやかに維持されていると指摘する（Griffin & Griffin (1997)も参照）．実際，彼らは現在でも定住を拒み，長い間住んでいた家を捨てて移動することを厭わない．また 5.2.2 でみたように親族関係が社会行動のベースにある点は根強く残っている．表面的には数多くの伝統が失われているように見えて，その根本的な彼らの傾向性(disposition)ないしハビトゥスは現在まで驚くほど変わっていないのである．

このような状況を鑑みる限り以下のように総括できるだろう．アルタ人は，農耕民の移入など周辺環境の変化や外部の文化からの影響を被りながらも，それに適応していくためにネグリートとしての民族的なアラインメントを調整することで，今でも農耕民と適度な距離を取りながら生活を送っている．そのような，むしろ能動的な適応の過程において，今回の言語のシフトが付随的に発生したと見ることができる．これは，外部の影響を取り込みながらも，それに対峙する，ネグリートの柔軟さの顕れとして認識されるべきであろう．

歴史を遡ると，ネグリートの全集団は数千年前にオーストロネシアへの劇的な言語シフトを経験している．しかしそれから数千年経った今でも，彼らは農耕民とは別のコミュニティを持ち，異なった生活習慣を維持している．我々研究者は彼らを，周囲の変化にうまく適応しながらも，自律的なアイデンティティを維持してきた能動的な主体として改めて捉え直す必要がある．

7. おわりに：危機言語の多面性を捉える必要性

本論文では，フィリピンのルソン島で話されてきたアルタ語（Arta）がどのような社会言語学的な状況におかれているか，その現状と誘因について議論した．UNESCO (2003)の指標に準じてやや詳細にアルタ語の活性度を記述したあと，なぜアルタ語が現在の状況にあるのかを，時間軸，因果の軸を持ち出して説明した．5 節では，アルタ語の現在の状況をどのように解釈・評価すべきかについて議論した．そこでは，言語を対象化してそれを否定的に評価するのではなく，彼ら自身の能動的な適応の仕方として捉え直せる可能性を示した．

本論文のタイトルでは「危機」という表現にカッコを付けている．ここには危機言語に関する従来からの固定的な認識的枠組みと価値判断を一旦保留し，相対化しようとする意図がある．Krauss (1992)にはじまる危機言語と言語復興のパラダイムは，環境問題，特に生物多様性のメタファーを効果的に用いることで，言語学内外の意識変革を促した．もちろんそれにより，世界の消滅しつつある言語の記録・記述が加速し，コミュニティを基盤とする言語復興の取り組みが本格化した点は高く評価できる．しかし，メタファーは，事柄の一側面の理解を促すが，他の側面を覆い隠す力がある(Lakoff & Johnson 1980:10)．生物種の絶滅と同じように言語の消滅を物象化して捉えることで覆い隠される側面はないだろうか．本当に，生物多様性の喪失と同じく，言語の喪失（シフト）はコミュニティにとって有害なのだろうか．言語がシフトすることでコミュニティがうまく現代社会に適応している側面はないだろうか．我々は，従来の認識的枠組みを当てはめるだけではなく，価値判断を一旦保留し，今一度当事者に目を向けた上で，「危機」言語問題の多面性を掬い上げる必要がある．

謝　辞

この論文は，社会言語科学会第 33 回研究大会「フィリピン・アルタ語の社会言語学的状況と言語危機」（2014 年 3 月，神田外語大学）と，第 12 回狩猟採集社会学会(CHAGS XII) “What language endangerment tells us about Negrito societies”（2018 年 7 月，マレーシアサインズ大学）での発表が元になっている．上記の発表においては Lawrence A.

Reid 氏，尾本惠市氏ほか，多くの方々のコメントが参考になった．また本論文の草稿に対して梶茂樹氏，川上夏林氏，小松原哲太氏，品川大輔氏，また編集委員の方，２名の匿名査読者の方々から有益なご意見を頂いた．心から感謝申し上げる．

なおこの研究は JSPS 科研費 20K13029「オーストロネシア化したフィリピン狩猟採集民言語の言語人類学・認知言語学的研究」，19KK0011「インドネシア・フィリピンにおける少数言語の記録とコーパス構築に基づく研究」の助成を受けている．

注

1) これは，死者の記憶を残さない彼らの文化と関係がある．彼らは，死んだ先祖がどのような名前で，自分の祖先がどこから来たかということを語り継がない．むしろ死んだ祖先の名前を口に出すことさえ憚られ，忘れ去ろうとする傾向がある（Headland 1986: , Rai 1990: 32）．
2) 狩猟で得られた獲物は，コミュニティ全体に均等にシェアされることが多いが，魚，野菜，嗜好品などはその義務はなく，親しい親族にシェアされる様子が見られる．
3) アルタ語含め多くのネグリート言語で，ネグリートと農耕民を含めた人一般を指す語がない．そのような文脈では *arta aydi:* 'and' *agani:* という必要があり，彼らの言語使用においては必ずその概念的対立が前提とした発話を行っているのである．
4) ただし，このアイデンティティの同一性を基盤にした同化は漸次的に発生したことに注意されたい．アイデンティティの同一性を軸にして，漸次的に婚姻関係が構築され，その婚姻関係・親族関係を通じて，ディスブからの移住が徐々に進んでいったと考えられる．
5) 琉球の言語のケースでも同様である．例えば，岩崎・大野（2013）では，琉球における戦後の方言札は，アメリカ占領下での悲願の日本復帰という話者内部の思いや，教師，保護者が子どもの将来を思って行った事情があると報告されている（ibid: 117）．

【参考文献】

Abreu, Marvin M. (2018). A reference grammar of Southern Alta (Kabuloan Dumagat), Ph.D dissertation, De La Salle University.

Austin, Peter K. (2010). Current issues in language documentation. In Peter K. Austin (ed.) *Language Documentation and Description* 7, 12-33. London: SOAS.

Bellwood, Peter. 2004. First Farmers: The origins of agricultural societies. Massachusetts: Wiley-Blackwell (長田俊樹・佐藤洋一郎訳　農耕起源の人類史　京都大学出版会)

Brenzinger, Matthias (2001) Language endangerment through marginalization and globalization. *Lectures on endangered languages 2: From Kyoto Conference 2000*, pp.91-116. Kyoto: Nakanishi Printing.

Burton, Lisa A.　(2013). Mother Tongue-Based Multilingual Education in the Philippines: Studying Top-Down Policy Implementation from the Bottom Up. Doctoral dissertation, University of Minnesota.

Costa James (2013) Language endangerment and revitalisation as elements of regimes of truth: shifting terminology to shift perspective. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 34(4), 317-331.

Crystal, David (2000) *Language death*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dobrin, Lise M., Peter K. Austin & David Nathan (2007) Dying to be counted: the commodification of endangered languages in documentary linguistics. In Peter K. Austin, Oliver Bond & David Nathan (Eds.) *Proceedings of Conference on Language Documentation & Linguistic Theory*, pp.59-68. London: SOAS.

Eberhard, David M., Gary F. Simons, & Charles D. Fennig (eds.). (2019). *Ethnologue: Languages of the World*. 22nd edition. Dallas, Texas: SIL International. Online version: http://www.ethnologue.com.

Fishman, Joshua A. (1991). Reversing language shift: Theoretical and empirical foundations of assistance to threatened languages. Clevedon: Multilingual Matters.

Florey, Margaret (Ed.) (2010) *Endangered Languages of Austronesia*. Oxford: Oxford University Press.

Gordon, Raymond. (ed.), 2005, *Ethnologue: Languages of the world*, 15th edition, Dallas, SIL International.

Grenoble, Lenore A. and Lindsay J. Whaley (2005) *Saving languages: An introduction to language revitalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Griffin, Marcus B. & P. Bion Griffin (1997). Agta foragers: Alternative histories and cultural autonomy in Luzon, *The Australian Journal of Anthropology* 8(3), 259-269.

Headland, Thomas N. (1986). Why foragers do not become farmers, Doctoral dissertation, University of Hawai'i.

Headland, Thomas N. (1987). Kinship and Social Behavior among Agta Negrito Hunter-Gatherers, *Ethnology* 26(4), 261-280.

Headland, Thomas N. (2003). Thirty Endangered Languages in the Philippines. *Work Papers of the Summer Institute of Linguistics, University of North Dakota Session* 47, 1-12.

Headland, Thomas. N. & Lawrence. A. Reid. 1989. Hunter-gatherers and their neighbors from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30, 43-51.

Hinton, Leanne, Leena Huss, Gerald Roche (eds.) (2018)

The Routledge handbook of language revitalization. New York: Routledge.

Himmelmann, Nikolaus P. (1998). Documentary and descriptive linguistics. *Linguistics* 36(1), 161-95.

岩崎勝一・大野剛 (2013). 宮古池間方言における言語衰退過程の考察　田窪行則 (編) 琉球列島の言語と文化:その記録と継承　くろしお出版, 109-216.

梶茂樹 (2002). アフリカにおける危機言語問題：はたしてクラウス説は当てはまるか　Conference Handbook on Endangered Languages, 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究事務局, pp.105-113.

Krauss, Michael E. (1992) The world's languages in crisis. *Language* 68, 4–10.

Kulick, Don (2019) A death in the rainforest (上京恵訳 最期の言葉の村へ　消滅危機言語タヤップを話す人々との 30 年　原書房)

Lakoff, George. & Mark Johnson (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: Chicago University Press.

Lecompte, Maarten (2018) The Emerging Storywriter: A Study of Linguistic and Meta-linguistic Phenomena in the Writing of Cèmuhi, a Melanesian Language of New Caledonia, Ph.D dissertation, Macquarie University.

Lewis, M. Paul & Gary F. Simons (2010). Assessing endangerment: Expanding Fishman's GIDS. *Revue roumaine de linguistique*, 65(2), 103-120.

Minter, Tessa. (2010). The Agta of the Northern Sierra Madre Livelihood strategies and resilience among Philippine hunter-gatherers, Doctoral dissertation, Universiteit Leiden (University of Leiden).

Miyaoka, Osahito (2001) Endangered languages: the crumbling of the ecosystem of language and culture, *Lectures on endangered languages 2: From Kyoto Conference 2000*, pp. 3-17. Kyoto: Nakanishi Printing.

Mufwene, Salikoko S. (2002) Colonisation, globalisation, and the future of languages in the twenty-first century. *International Journal on Multicultural Societies*, 4(2), 162-193.

Mufwene, Salikoko S. (2017) Language vitality: the weak theoretical underpinnings of what can be an exciting research area. *Language* 93(4), e202-e223.

Philippine Statistics Authority (2017) Quirino Statistical Tables.<https://psa.gov.ph/population-and-housing/statistical-tables> (2020 年 1 月 30 日)

Rai, Navin K. 1990. *Living in a lean-to: Philippine Negrito foragers in transition*. Ann Arbor: University of Michigan Museum of Anthropology.

Republic Act No. 8371 (1997). The Indigenous Peoples' Rights Act of 1997, Republic of the Philippines.

Reid, Lawrence A. (1989). Arta, another Philippine Negrito language, *Oceanic Linguistics* 28(1), 47-74.

Reid, Lawrence A. (1994) Possible non-Austronesian lexical elements in Philippine Negrito languages. Oceanic Linguistics 33(1), 37-72.

Reid, Lawrence A. (2013). Who are the Philippine Negritos? *Human Biology* 85(1) 329-358.

Robinson, Laura C. (2008) Dupaningan Agta: Grammar, Vocabulary, and Text. Doctoral dissertation, University of Hawai'i.

Robinson, Laura C. & Jason Lobel (2013). The Northeastern Luzon subgroup of Philippine languages *Oceanic Lingustics* 52(1), 125-168.

Stock, Jay T. (2013). The Skeletal Phenotype of "Negritos" from the Andaman Islands and Philippines Relative to Global Variation among Hunter-Gatherers. *Human Biology*, 85(1–3), 67–94.

田窪行則 (編) (2013). 琉球列島の言語と文化：その記録と継承　くろしお出版.

Thieberger, Nick (2016). Documentary Linguistics: Methodological Challenges and Innovatory Responses. *Applied Linguistics*. 37(1), 88-99.

Tsunoda, Tasaku (2006) *Language endangerment and language revitalization: An introduction*. Berlin: Mouton De Gruyter.

UNESCO Ad Hoc Expert Group (2003) Language vitality and endangerment. International expert meeting on the UNESCO programme safeguarding of endangered languages, Paris, 2003.

Vanoverbergh, Morice (1925). Negritos of northern Luzon. *Anthropos* 20, 148-201, 390-443.

Vanoverbergh, Morice (1937-1938) Negritos of eastern Luzon. *Anthropos* 32, 905-928 and 33, 584-613.

Walker, Brian, C. S. Holling, Stephen R. Carpenter, & Ann Kinzig (2004). Resilience, Adaptability and Transformability in Social-ecological Systems, *Ecology and Society* 9(2): 5 <https://www.ecologyandsociety.org/vol9/iss2/art5/> (2020 年 2 月 5 日).

Wendel, John & Patrick Heinrich (2012) A framework for language endangerment dynamics. *International Journal of the Sociology of Language* 218, 145-166.

(201X 年 X 月 X 日受付)
(201X 年 X 月 X 日修正版受付)
(201X 年 X 月 X 日掲載決定)
※論文投稿時は日付を記載せずこれらの行は変更しないでください